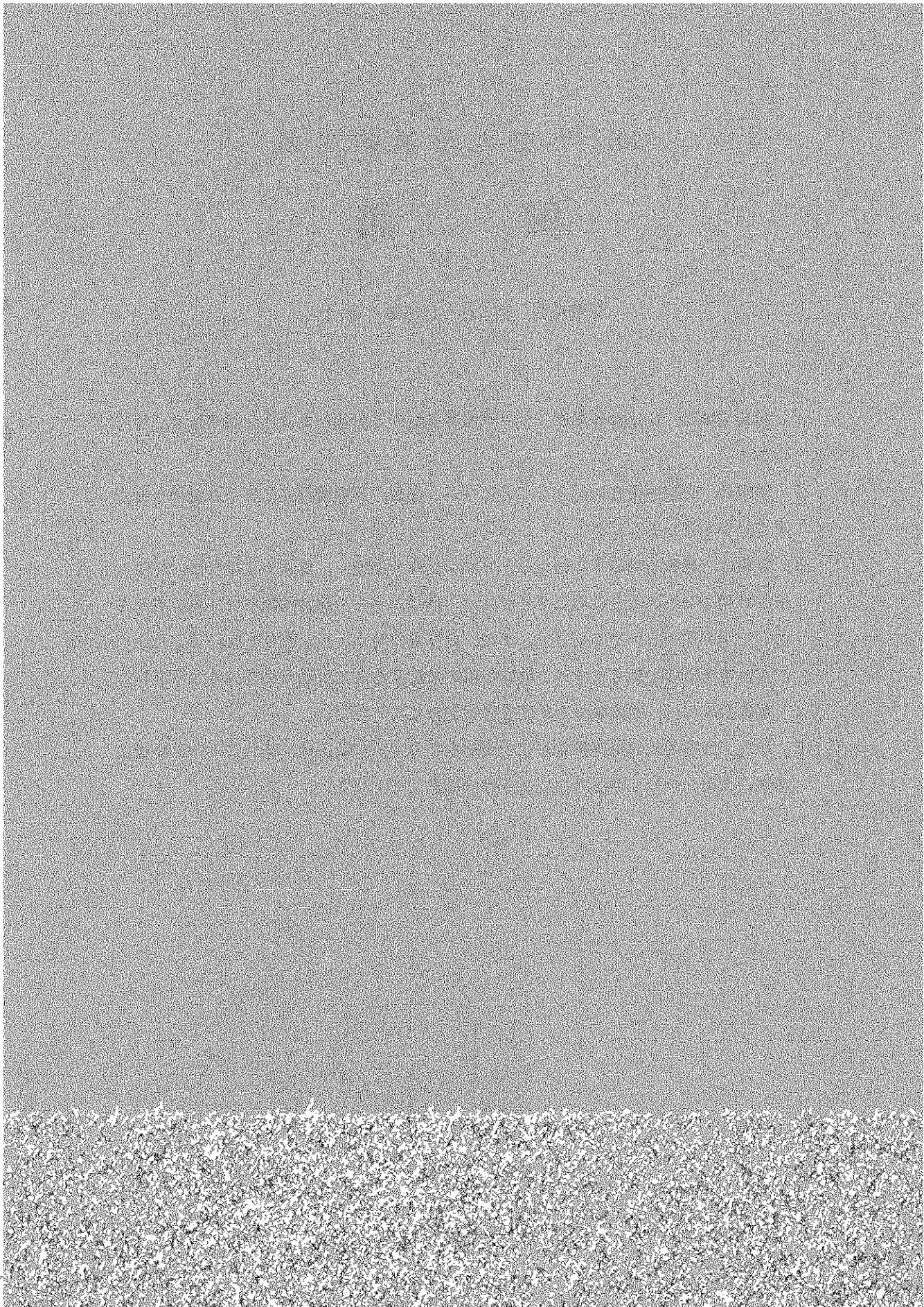


2014 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:35～15:05 90分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

われわれは今日音楽を語るとき、「クラシック」／「ポピュラー」という二分法を採用するのが普通である。これと同様の分類はドイツ語にもある。「E-Musik」と「U-Musik」というのがそれである。「E」は“ernst(真面目な)”の、また「U」は“Unterhaltung(娯楽)”の頭文字であり、要するに、「真面目な音楽」／「娯楽音楽」という二分法である。これとまったく異なるわけではないが、同(1) 異(2) の二分法はほかにもある。「民俗音楽」「軽音楽」(最近あまり聞かないが)、「キッチュ」といった概念が用いられるときには、常にその(3) 項として「芸術音楽」を想定した二分法的枠組みが前提されているのである。そしてこのような二分法が用いられる際には、意識するとしなやかにかかわらず、価値的な差別のコンテクションが含意されている。つまりこの区分は、「真面目」な音楽や「芸術音楽」は「高級」な音楽であり、「娯楽音楽」や「民俗音楽」は「低俗」な音楽である、という価値の上での上下関係をともなった区別なのである。だから「クラシック」の音楽家が「芸術家」という独特のステータスを獲得することによって受ける種の尊敬を演歌歌手が受けることはまずないし、子供が演歌をやりたいなどと言おうものなら真っ赤になって反対するであろう親たちが、大切な一人娘を音楽大学の声楽科に入学させて怪しまないなどという現象が起きるのである。音大の声楽科を出てもまともな声楽家になれる確率は、演歌歌手の場合と同じくらい微々たるものであり、しかも成功したときの金銭的な見返りは演歌歌手のほうがはるかに大きいにもかかわらずである。

音楽を「高級」なものと「低俗」なものに区分するこの二分法の発想は決して古いものではなく、十九世紀にでき上がったものである。もちろん宮廷で客を集めて行われる演奏会でやられるような音楽と、巷ちまたのおじさんたちが仕事をしながら口ずさむような音楽との区別は現象としては存在したであろう。しかしそれは種類の違いであり、決して「高級」と「低俗」という価値の違いではなかった。ちょうど、十八世紀の「真面目な」聴衆たちが、音楽を聴かない聴衆たちとアマルガム的に共存していることを不思議とも思っていないかったように、人々は「真面目な」音楽と「娯楽」のための音楽が同じカテゴリーに属することを何

ら不思議と思っていなかったのである。

このことは、美学の歴史の中でこの時代が占める位置を考えれば納得のゆくことである。十八世紀から十九世紀にかけては、美や芸術に関する思想に地滑り的な大変動が起った時期なのである。「獨創性」「作品」「天才」といった、芸術を語る上での常套句となる概念が今日的な意味で確立するのは、すべてこの時代のことである。もっと言えば、今日的な意味での「芸術」というカテゴリー自体がこの時代以前にはそもそも存在しなかったのである。今日でこそわれわれは絵画、演劇、音楽、文芸、建築といったおおよそ異質なものを一つの類と考えて「芸術」という名で呼んでいるが、そういう発想は十八世紀中頃に至るまで確立しなかった。正確に言えば、「芸術 (Art)」の語源にあたるラテン語の *ars*、さらにさかのぼってギリシャ語の *Τεχνη (technē)* という語はこれらをひっくるめて呼ぶ語ではあったが、より一般的に「わざ」全般を指す語であり、一六九〇年に至ってもなお、兵法、航海術、光学、力学といった「わざ」と、今日で言う「芸術」に属する「わざ」との間には明確な一線が引かれていなかったのである (佐々木健一「近世美学の展望」、今道友信編『講座美学1 美学の歴史』一〇二頁)。その意味で、独特の価値的なコノテーションを含んだ「芸術音楽」の思想が十九世紀に至るまで存在しなかったのは不思議ではない。

それではこうした地滑り的な変動の時代にあつて、いったいこの「芸術音楽」と「娯楽音楽」の二分法、そしてその根底にある「高級」な音楽と「低俗」な音楽の二分法の考え方はいかにして生じたのであろうか？ この問題について最近ベルント・シュボンホイアーというドイツの研究者がすぐれた美学史的研究を発表した。「芸術としての音楽と非芸術としての音楽——カントからハンスリックに至る音楽美学思想における《高級》音楽と《低俗》音楽の二分法に関する考察」と題されたこの精緻な研究に述べられていることをわかりやすくパラフレーズすると、おおよそ次のような構図が浮かび上がってくる。

この時代の美学の課題は、かつてその独立した地位を認められていなかった芸術に対して、いかにしてその独自の存在意義を保証してやるかということにあつた。そのために美学者たちは「美」という独自の価値の存在を主張し、その「美」の体験を最も純粹に実現する場として芸術を位置づけようとした。その基本精神は芸術を「精神」と「感覚」という元来背

二つの領域を調停的に綜合する中項 (Mittel) として位置づけることにあつた。

A 芸術体験は感性的体験でありながら、(5) する

煙草をすつたり旨いものを食べたりのとは異なる、ある種の精神的なものとの関わりをもち、また逆に精神的体験でありながら、哲学書を読むというような観念的な体験とは異なって直接に感性に働きかける性質をもつ。 **B** この時代の美学者たちが一貫して問題としたのは芸術のこのような側面であった。彼らは芸術のそのような側面を、そこで実現される美という価値のもつ質の特異性と重ね合わせることにによって何とか説明しようとしたのであった。

C 一見統一がないほどに変化に富んでいる対象が、それでもなお統一を保持しているとき、対象は美しい、というこの考え方は要するに、ただバラバラでまとまりがないものも、またただ統一があるだけで単調なものも美的にはなりえない、ということなのだ。ここで「多様」は感性にあらわれる現象の多様性であり、「統一」は精神によって捉えられる内的な一貫性である。

D つまり、感性に立ち現われてくる無秩序で多彩な現象が精神の働きによってある種の統一をもつものとして認知されるときに、対象は美しいものとなる、というのがこの考え方の根底にある構造なのである。

E 美的体験の場となる芸術作品はそのように作られなければならないし、鑑賞者もまた、そのように鑑賞しなければならない、つまり、その多彩な現われを感性的に知覚するとともに、精神を働かせてそれを統一的に理解するような見方が求められる、それがこの理論の言わんとすることであった。その後カントが美の定義に用いた「目的なき合目的性」という矛盾に満ちた概念も、また、ヘーゲルが美の規定に用いた「理念の感性的顕現」という語も、その線上にあると言って差し支えない。

さて、このような一般美学の要請に照らしたとき、音楽はどのような状況にあったであろうか？ 十八世紀には音楽は、この新しい「芸術」の概念が要求するような意味での精神性との関わりが希薄な存在として捉えられていた。言語芸術や造形芸術とは違って、音楽は思想や具体的形象とつながりにくいだけに、ただ耳に快適なだけの感覚の遊戯にすぎないと考えられがちであった。演奏会がしばしば人間の社交的な関係を維持するための手段としての性格をもち、ターフェルムジーク（食卓の音楽）に代表されるような、ある種BGM的なものになりやすかったということが、それに **(6)** 車をかけた。カントの「判断力批判」における音楽の地位が不当に低くなっているのはこのような事情によっている。彼が音楽をもつばら情動を刺激するものとしてのみ問題にしているとき、彼の念頭にあるのはターフェルムジークのような社交音楽であると考えてまず間違いない。

しかしこれは、この時代のごく一般的な音楽観にすぎなかった。それだけではない。古代ギリシャ以来伝統的に音楽に帰せられてきた「デモーンニッシュな力」のイメージもまた、「精神性」とは相反するマイナス・イメージとして受け取られた。そのたごとの音によって冥界の動物や鬼神たちを感動させてエウリュディケーを連れ帰ることを許されたという、あのオルペウスの神話以来、幾度となく語られてきた、音楽が病気を治したり、人の魂に働きかけて「改心」させてしまったり、という話に託された音楽のもつ「力」は、もっぱら人間の(7)な領域に訴えるもので、近代芸術のイメージする精神性からは程遠いものであった。こうして音楽は、新たな局面を迎えつつある芸術のありかたに照らして、このままではその存在を正当化できないという危機に立たされたのである。

このような状況の中で、美学が芸術一般への要求に照らして音楽に与えた芳しからぬ評価を払拭し、自己正当化をはかるための戦術 (Strategy) として音楽美学が、こうした要求に合わない種類の音楽を「低級」として切り捨てる方針をとった、というのがシュポンホイアーの主張の眼目である。つまり、ターフェルムジークのような感覚的に消費される音楽や、もっぱら情念に訴えることによって効果を發揮する音楽を、芸術としての音楽の本来のありかたにもとるものとして退け、「精神性」と関わる側面を強化してゆくことが、音楽にとっては自らをまともな芸術として評価してもらうための唯一の道だったのである。それだけに音楽においては、この「精神化」が過激におしすすめられた。

(渡辺裕『聴衆の誕生』による)

注 キッチュ……低俗。

コノテーション……内包された潜在的意味。

アマルガム……混合、寄せ集め。

ハンスリック……ウィーンで活躍した音楽評論家。パラフレーズ……別の言葉でわかりやすく述べること。

デモーンニッシュ……悪魔的。オルペウス(オルフェウス)……ギリシャ神話に登場する音楽の名人。亡き妻エウリュ

ディケーを冥界から連れ戻そうとした。

〔問一〕 空欄(1)と(2)に漢字を一字ずつ入れ、「外見は違っているようだが、内容は同じであること」を意味する四字熟語にする

とき、空欄に入れるのもっとも適切なものをそれぞれA、Eの中から選び、符号で答えなさい。

(1)

E	D	C	B	A
床	大	音	体	工

(2)

E	D	C	B	A
小	曲	口	夢	義

〔問二〕 空欄(3)(7)に入れるのもっとも適切な語句をそれぞれA、Eの中から選び、符号で答えなさい。

(3)

E	D	C	B	A
同類	限定	対立	一般	共通

(7)

E	D	C	B	A
非公式的	非日常的	非社会的	非合理的	非生産的

〔問三〕 空欄(5)(6)に入れるのもっとも適切な漢字をそれぞれ一字で答え、楷書で正確に書きなさい。

〔問四〕 次の文が入るもつとも適切な箇所を本文中の空欄A～Eの中から選び、符号で答えなさい。

十八世紀を通じて最も重要な美の原理として言及されてきた「多様における統一」という考え方の中に、すでにこの「感性」と「精神」の総合という方向性は見て取れる。

〔問五〕 傍線(4)「地滑り的な大変動」について、この大変動の内容として本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、

合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 絵画や建築が兵法や航海術よりも高度なわざであると考えられるようになった。

イ 芸術の基本的特徴として、感性と並んで精神性が重視されるようになった。

ウ それまでの音楽の特徴とされていた、人間の感情に訴える力が減少した。

エ ターフェルムジークのような社交音楽が駆逐され、演奏されなくなった。

オ 「芸術音楽」というカテゴリーが確立し、音楽が高級と低級とに二分された。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

さて、多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。みながみな口を揃えてだまされていたという。私の知っている範囲ではおれがだましたのだといった人間はまだ一人もない。ここらあたりから、もうぼつぼつわからなくなってくる。多くの人にはだましたものとだまされたものとの区別は、はっきりしていると思つてゐるようであるが、それが実は錯覚らしいのである。たとえば、民間のものは軍や官にだまされたと思つてゐるが、軍や官の中へはいればみな上のほうをさして、上からだまされたというだろう。上のほうへ行けば、さらにもつと上のほうからだまされたというにきまつてゐる。すると、最後にはたった一人か二人の人間が残る勘定になるが、いくら何でも、わずか一人や二人の智慧で一億の人間がだませるわけのものではない。

(1) しかもそれは、「だまし」の専門家と「だまされ」の専門家とにカクセンと分れていたわけではなく、いま、一人の人間がだれかにだまされると、次の瞬間には、もうその男が別のだれかをつかまえてだますというようなことを際限なくくりかえしていたので、つまり日本人全体が夢中になつて互いにだましたりだまされたりしてゐたのだらうと思ふ。

このことは、戦争中の末端行政の現われ方や、新聞報道の愚劣さや、ラジオのばかばかしさや、さては、町会、隣組、警防団、婦人会といったような民間の組織がいかに熱心にかつ自発的にだます側に協力してゐたかを思い出してみれば直ぐにわかることである。

たとえば、最も手近な服装の問題にしても、ゲートルを巻かなければ門から一步も出られないようなこつけないことにしてしまつたのは、政府でも官庁でもなく、むしろ国民自身だったのである。私のような病人は、ついに一度もあの醜い戦闘帽というものを持たずにすんだが、たまに外出するとき、普通のあり合わせの帽子をかぶつて出ると、たちまち国賊を見つけたような憎悪の眼を光らせたのは、だれでもない、親愛なる同胞諸君であつたことを私は忘れない。もともと、服装は、実的要求に幾分かの美的要求が結合したものであつて、思想的表現ではないのである。⁽³⁾しかるに我が同胞諸君は、服装をもつて唯一の思想的表現なりと勘違いしたか、そうでなかつたら思想をカムフラージュする最も簡易な隠れ蓑^{かぶ}としてそれを愛用したのであらう。そし

てたまたま服装をその本来の意味に扱っている人間を見ると、彼らは眉を逆立てて憤慨するか、ないしは、眉を逆立てる演技をして見せることによつて、自分の立場の補強につとめていたのであろう。

少なくとも戦争の期間をつうじて、だれが一番直接に、そして連続的に我々を圧迫しつづけたか、苦しめつづけたかということを考えると、だれの記憶にも直ぐ蘇よみがえってくるのは、直ぐ近所の小商人の顔であり、隣組長や町会長の顔であり、あるいは郊外の百姓の顔であり、あるいは区役所や郵便局や交通機関や配給機関などの小役人や雇員や労働者であり、あるいは学校の先生であり、といったように、我々が日常的な生活を営むうえにおいていやでも接触しなければならぬ、あらゆる身近な人々であつたといふことは、いふた何の意味するのであろうか。

いうまでもなく、これは無計画な癡狂戦争の必然の結果として、国民同士が相互に苦しめ合うことなしには生きて行けない状態に追い込まれてしまつたためにほかならぬのである。そして、もしも諸君がこの見解の正しさを承認するならば、同じ戦争の間、ほとんど全部の国民が相互にだまし合わなければ生きて行けなかつた事実をも、等しく承認されるにちがいないと思ふ。

しかし、それにもかかわらず、諸君は、依然として自分だけは人をだまさなかつたと信じているのではないかと思ふ。

そこで私は、試みに諸君にきいてみたい。「諸君は戦争中、ただの一度も自分の子にうそをつかなかつたか」と。たとえば、はつきりうそを意識しないまでも、戦争中、一度もまちがつたことを我子わがこに教えなかつたといいきれる親がはたしているだらう

か。

(4) いたいけな子供たちは何もいいはしないが、もしも彼らが批判の眼を持っていたとしたら、彼らから見た世の大人たちは、一人のこらず戦争責任者に見えるにちがいないのである。

もしも我々が、真に良心的に、かつゲンシユク⁽⁵⁾に考えるならば、戦争責任とは、そういうものであらうと思ふ。

しかし、このような考え方は戦争中にだました人間の範囲を思考の中で実際の必要以上に (6) しすぎているのではないかという疑いが起る。

ここで私はその疑いを解くかわりに、だました人間の範囲を (7) にみつもつたらどういふ結果になるかを考えてみたい。

もちろんその場合は、ごく少数の人間のために、非常に多数の人間がだまされていたことになるわけであるが、はたしてそれによってだまされたものの責任が解消するであろうか。

だまされたということは、不正者による被害を意味するが、しかしだまされたものは正しいとは、古来いかなる辞書にも決して書いてはないのである。だまされたときえいえば、いつさいの責任から解放され、無条件で正義派になれるように勸ちがいしている人は、もう一度よく顔を洗い直さなければならぬ。

しかも、だまされたものが必ずしも正しくないことを指摘するだけにとどまらず、私はさらに進んで、「だまされるということ自体がすでに一つの悪である」ことを主張したのである。

だまされるということはもちろん知識の不足からもくるが、半分は信念すなわち意志の薄弱からもくるのである。我々は昔から「不明を謝す」という一つの表現を持っている。これは明らかに知能の不足を罪と認める思想にはかならぬ。つまり、だまされるということもまた一つの罪であり、昔から決していばっていいことは、されていけないのである。

もちろん、純理念としては知の問題は知の問題としてシユウシすべきであつて、そこに善悪の觀念の交差する余地はないはずである。しかし、有機的生活体としての人間の行動を純理的に分析することはまず不可能といつてよい。すなわち知の問題も人間の行動と結びついた瞬間に意志や感情をコンプレックスした複雑なものに変化する。これが「不明」という知的現象に善悪の批判が介在し得るゆえんである。

また、もう一つ別の見方から考えると、いくらだますものがいてもだれ一人だまされるものがなかったとしたら今度のような戦争は成り立たなかつたにちがいないのである。

つまりだますものだけでは戦争は起らない。だますものとだまされるものがそろわなければ戦争は起らないということになると、戦争の責任もまた（たとえ軽重の差はあるにしても）当然両方にあるものと考えるほかはないのである。

そしてだまされたものの罪は、ただ単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにもゾウヤ(9)なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまつていた国民全体

の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが

(10)

なのである。

このことは、過去の日本が、外国の力なしには封建制度も鎖国制度も独力で打破することができなかった事実、個人の基本的人権さえも自力でつかみ得なかつた事実とまかつたその本質を等しくするものである。

そして、このことはまた、同時にあのようなセンオウと圧制を支配者にゆるした国民の奴隷根性とも密接につながるものである。

それは少なくとも個人の尊嚴の冒瀆、すなわち自我の放棄であり人間性への裏切りである。また、悪を憤る精神の欠如であり、道徳的無感覚である。ひいては国民大衆、すなわち被支配階級全体に対する不忠である。

我々は、⁽¹¹⁾はからずも、いま政治的には一応解放された。しかしいままで、奴隷状態を存続せしめた責任を軍や警察や官僚にのみ負担させて、彼らの跳梁を許した自分たちの罪を真剣に反省しなかつたならば、日本の国民というものは永久に救われるべきはないであろう。

「だまされていた」という一語の持つ便利な効果におぼれて、一切の責任から解放された氣でいる多くの人々の安易きわまる態度を見ると、私は日本国民の将来に対して暗澹たる不安を感じざるを得ない。

「だまされていた」といつて平気でいられる国民なら、おそらく今後何度でもだまされるだろう。いや、現在でもすでに別のうそによってだまされ始めているにちがいないのである。

一度だまされたら、二度とだまされまいとする真剣な自己反省と努力がなければ人間が進歩するわけではない。この意味から戦犯者の追及ということもむしろ重要ではあるが、それ以上に現在の日本に必要なことは、まず国民全体がだまされたということの意味を本当に理解し、だまされるような脆弱な自分というものを解剖し、分析し、徹底的に自己を改造する努力を始めることである。

(伊丹万作(大江健三郎編)『伊丹万作エッセイ集』による)

注 ゲートル……ズボンの裾をまとめる筒状や帯状の布。 雇員……官庁等で手伝う事務員。 癡狂……狂気。
 純理……純粋な理論。 跳梁……好ましくないものがはびこること。

〔問一〕 傍線(2)(5)(8)(9)(11)のカタカナを漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

- (2) カクゼン (5) ゲンシユク (8) シユウシ (9) ゾウサ (11) センオウ

〔問二〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適切な文をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A しかし、だまされていた人間の数は、だましていた人間の数をはるかに上回っていたにちがいないのである。
 B それでも、だましていた人間の数は、一般に考えられているよりもはるかに少なかったにちがいないのである。
 C さらに、だましたものとだまされたものは区別しがたく、日本人全体がだまされていたにちがいないのである。
 D すなわち、だましていた人間の数は、一般に考えられているよりもはるかに多かつたにちがいないのである。
 E いうまでもなく、だましていたものとだまされたものの数は同じくらいだったにちがいないのである。

〔問三〕 傍線(3)「しかるに」、(4)「いたいけな」、(12)「はからずも」の意味としてもっとも適切なものをそれぞれA～Eの中から
 選び、符号で答えなさい。

- (3)
 A それゆえに
 B それなら
 C それどころか
 D それなのに
 E そのために

- (4)
 A 天真爛漫てんしんらんまんな
 B 思い煩おもひわづう
 C いじらしい
 D 察さつしの良い
 E いたましい

- (12)
 A 望み通りに
 B 幸さいいなことに
 C 遅おそればせながら
 D 不ふ十分なながらも
 E 思おもいがけなくも

〔問四〕 空欄(6)(7)(10)に入れるのにもっとも適切な語句をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(6)				
E	D	C	B	A
拡張	制限	忖度 <small>てんぶ</small>	軽視	重視

(7)				
E	D	C	B	A
良心的	理性的	批判的	最小限	最大限

(10)				
E	D	C	B	A
戦争の正体	戦争の矛盾	悪の本体	悪の結果	悪の矛盾

〔問五〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 国民全体が悪を憤る精神を取り戻して反省し、だまされることの意味を問わなければ、日本人はこれからも何度でもだまされることになるであろう。

イ 国民全体の無気力や無自覚、無反省、無責任がだまされる体質を生み出し、戦争を長期化させる原因となったことを日本人は反省するべきである。

ウ 無計画な癡狂戦争の結果として、国民は誰しも子供にうそをつかさざるを得ない状況に追い込まれたが、それによって戦争責任を免れるわけではない。

エ 戦争中は多くの人が知識不足によって批判力や思考力を奪われていたのだから、だましていた側の責任をだまされていた側の被害者に転嫁すべきではない。

オ 多くの国民が「だまされていた」という便利な言葉の効果におぼれて一切の責任から解放されたのは、日本固有の「不明を謝す」という思想の影響である。

三 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(25点)

まず、問題となるべき因果関係を提示しておこう。

(A) 「低線量放射線を長期に被曝^{ばくばく}したら、がん死する」

命題(A)を検討するには、最初に「被曝を長期にしたら、がん死する」というところの、「たら」ということの意味を吟味する必要がある。この点について、まずは一般的な視点からアプローチしていき、徐々に命題(A)へと立ち戻っていきよう。

マッチの火をロウソクに近づけたら、炎がともった。二〇一一年三月一日の夜、東日本の多くの家庭(私の家もそうだった)で生じた、この現象から議論を起してみよう。何が問題なのか。あの夜の恐怖感、心細さを別にするならば、マッチの火を近づけたらロウソクの炎がともったという、この現象は何の変哲もない。けれども、こうした変哲もないところから、まさしく「変」な「哲」学が始まるのである。「変」といつても、日常的に一見変に聞こえるというだけで、学問的には変どころか、人類の思考の核心にかかわる、きわめて根源的な反省の端緒がここに開かれるのである。議論を明確にするために、例となる文を明示しておく。

(a) マッチの火をロウソクに近づけたら、炎がともった。

ここでのポイントは、「ロウソクに近づけたら」の「たら」にある。このことは先の命題(A)と共通する。さてでは、これはどういう「たら」か。あることが生じた後で、別のことが生じた、という時間的な順序を意味する「たら」だろうか。次の例を考えてみよう。

(b) ぼくが電車に乗ったら、窓際の席に座っていた女性がくしゃみをした。

この (b) の状況での「たら」は、おそらく時間的な順番を示す「たら」だろう。つまり、「ぼくが電車に乗ること」と、「女性がくしゃみをする事」とが、たまたま時間的に連続して生じた、ということだけを示すように思われる。それに対して、(a) の状況での「たら」は、どうだろうか。どうも、(b) の場合とは違うように聞こえる。「たまたま」ではないだろう。では、何だろうか。言うまでもない。(a) の状況での「たら」は「因果関係」(causation)を示す「たら」なのである。そしてむろん、先の命題 (A) での「たら」もまた、明らかに因果関係の「たら」として私たちの前に立ち現われ、そうであるからこそ不安の源となっているのである。

ということとは、「因果関係」というものは、「たまたま」成り立つものではなく、もっと別の関係性なのだろうか。卑近な例で恐縮だが、すこし掘り下げて考えていこう。

もしロウソクが湿っていたなら、と想像してみよう。その場合、マッチの火を近づけても炎がともることはないだろう。(a) の状況は、ロウソクが湿っていなかったから成り立ったのである。では、ロウソクが湿っていなかったのは「たまたま」ではないのだろうか。(1)、いろんな場合がありうる。ロウソクを使うことを見越して、持ち主が乾燥した場所に意図的に保管

していたならば、「たまたま」とは言い難い。(2)、炎をともすことを目的として、マッチをする人が乾燥したロウソクを探して選んだという場合も、人の意図がかかわるので、「たまたま」とは言いにくい。そして、このように、ロウソクは乾燥している、ということをもそもも前提するならば(そのことに疑問を持つ必要がないと仮定するならば)、マッチの火を近づけることと、炎がともることとの間には、「たまたま」ではなく「必ず」という関係性が成立していると考えられる。すなわち、「必然性」である。

これに対して、(b) のような「たまたま」という関係性は「偶然性」と呼ばれてきた。ということは、(a) と (b) の違いは、(a) はマッチの火と炎との間に必然的な結びつきがあり、それゆえ因果関係であると言えるのに対して、(b) は単に「た

またま」時間的に連続して発生した偶然的な現象にすぎない、というコントラストにあると、そう言えそうである。

しかし、いま見てきたことから明らかなように、(a)での「必然性」は、ロウソクは乾燥しているという前提のもとに成り立つ関係性にすぎない。こうした前提に疑いをほさむ余地がある場合には、話が違ってくるのではなからうか。たとえば、火を付けようとしている人がいろいろな条件の下にあるロウソクから一つを無作為に取り出し続ける場合、そのロウソクにマッチの火を近づけて炎がともつたのは「たまたま」ではないか、と思えてくる。

③、なぜロウソクに火を付けようと思つたのか、なぜマッチを使おうと思つたのか、と問いを重ねていくならば、「必然性」の装いは徐々に薄れ、「偶然性」が支配しているのではないかという思いが前面に現れてくる。

さらに、もう少し哲学的な突っ込みを加えるならば、ロウソクの炎は燃焼や酸化に関する自然法則に従って生じている現象だと言えるが、④、そうした自然法則それ自体、絶対にそうでなければならぬという「必然性」はあるのだろうか。別の法則性が支配している世界というのは考えられないのだろうか。哲学者たちはそうした可能性について、「可能世界 (possible world)」といった概念を用いながら、長い間真剣に論じてきた。ライブニッツの哲学などがその端緒にあたる。このことは、言い換えるならば、私たちの世界以外の世界の存在可能性を認めるならば、現在のここでの自然法則に従つた世界にいま私たちが暮らしているということそれ自体、「たまたま」だということになるのである。

こうした言い方は決して常識離れてはいない。皆さんは、なぜ自分はここに生まれてきたのだろう、と考えたことはないだろうか。なぜこの時代のこの場所に、他ならぬ自分が、こうして存在しているのか、と。不思議な感覚である。しかし、多くの人が一度は抱く感覚ではないか。私が思うに、こうした次元にこそ「偶然性」の概念が宿っているのである。

私は、今回の原発事故の渦中にいる私たちにとつても、こうした「偶然性」への感覚は無関係ではないと確信している。そうした感覚は無常感にもつながるものであり、生き死にの問題が眼前に突如として現れたとき、私たち自身が、なにゆえ、こうした時代、この特定の状況のなかに生を受けたのか、という問いへの目線が生まれゆくのである。

しかし、だとしたら、結局 (a) と (b) は相違がない、ということになってしまわないか。実は、そのように (a) と (b)

が相違がない、というような理解可能性があるということを伝えること、それがここで論じる重大なる眼目なのである。そのことによつて、因果関係の不思議を体得していただき、問題の核心をなす命題(A)に向きあう哲学的な視線をもつていただくことを願っているのである。それが何の役に立つのか、と言われるかもしれない。けれども、一つの事態に対して多様な見方がありうる、ということをわきまえているのといないのでは、生活実感にも違いが現れてくるのではないだろうか。私はいつも學生に、「自分が思っているのは異なる見方がある」ということを実感していることが教養の意味だと考えている、と伝えていゝる。哲学研究に携わる者として、ここでも同じメッセージを届けたい。

さて、(a)と(b)とが相違がないという論点について、ここではそれを、(a)にも「たまたま」と描写すべき側面があることを指摘することで導き出したが、逆の方向からも同様なことが言える。すなわち、(b)の事態についても、実は(5)というのではなく、因果関係が成り立っていると考える可能性があるのである。たとえば、「電車に入り込んだばかりの身体に花粉が付いていて女性のアレルギー反応を引き起こしたとか、入り込んだきた外の風に反応したとか、因果関係を推測しうる道筋はいくらでもある。

こうした想像はばかっていると感じられるかもしれない。しかし、よく思い出してほしい。人類の自然科学の探究は、ざっくり言つて、ほとんどすべての場合、不可思議に見える自然現象の原因を探るといふことを端緒としてきたと捉えることができる。反復実験、観察、疫学調査など、アプローチは多様だとしても、すべて究極的には広い意味での(さしあたり)相関関係⁽⁶⁾だけを探るといふ場合も含めて(原因探究の文脈にある。そして、そうした原因探求は、多様な因果関係の可能性を検証する、という形で遂行される。そのようにして、原因特定に至ることもあつたわけである。蚊による黄熱ウイルスの媒介と黄熱病の発症の因果関係のケースなどを想起せよ(蚊の媒介など最初はばかげた発想だと思われた)。こうした点に鑑みると、(b)の事態についても、因果関係の可能性を想定して、それを探っていく、というのはまったくの不合理であるとして一蹴⁽⁷⁾できないはずなのである。

ただし、そのような探究の後に原因特定に至つたとしても、先に(a)に関して見たように、再び「たまたま」にすぎない、

というように再解釈されてしまう道筋が現れる。再び、「偶然性」にすぎないのであって、「必然性」とはいえない、というように考える道筋が蘇^{よみがえ}ってきてしまうのである。これは果たして、どう理解したらよいのだろうか。原因と結果とは、どのような関係なのだろうか。まるで迷宮に迷い込んだようである。

こうした迷宮性は、他にもいろいろな仕方で確認できる。(a)に関して、ごく日常的な状況であるならば、つまり、ロウソクの湿り気などについて疑問が出る余地がない状況であるならば、「マッチの火をロウソクに近づけること」が「炎がともる」ことの原因である。けれども、もし月面にて、(a)「マッチの火をロウソクに近づけたら、炎がともった」が発生したならどうだろうか。これを(a')として、次のように表現する。

(a') 月面にて、マッチの火をロウソクに近づけたら、炎がともった。

もし本当にこの(a')が発生したとするなら、私たちはこの事態の原因をどのように理解するだろうか。間違はなく、「酸素がある！」と驚いて、酸素の存在を真っ先に原因として言い立てるだろう。厳密に言えば、この場合は、酸素の存在は、マッチの火とロウソクの炎の両方に対して原因として指定されているはずだが(その点で(a)の原因指定とは構造が多少異なるが)、だとしても、炎の原因として酸素の存在が指定されていることは確かである。

しかし、では、このような事態は何を物語っているのだろうか。私が思うに、それは、原因と結果の関係というのは、真実には、「これが原因で、これが結果だ」という客観的事実として成り立っているのではなく、何らかの選択行為とともに「これを原因結果として見る」という理解の営みなのだ、ということを示唆しているのではなからうか。ある種の物語、シナリオ、として因果関係は現れてくるのであって、「この一つの事象の原因はこの特定の一つの事象だ」という断定は、本質的に、シナリオの中の一つの台詞^{セリフ}としての断定なのではないか。もちろん、そっだとしても、何でも言える、何でも認定される、ということではまったくくない。受け容れられやすさ、受容可能性、というものが考慮されなければならないのである。シナリオ中の台詞

が、多少のアドリブは認められるし、その方が評価される場合さえあるとしても、大きな制約の中にあるように。

これまで論じてきたところの含意は、冒頭の命題、(A)「低線量放射線を長期に被曝したら、がん死する」もまた、こうした因果関係一般のあり方の中に組み込まれる、という点を指摘することにある。命題(A)に表されている低線量被曝の因果的影響も、一種のシナリオ性を本質として持ち、しかし同時に、受容可能性による評価にさらされる、ということである。

(一ノ瀬正樹『放射能問題に立ち向かう哲学』による)

〔問一〕 空欄(1)(2)(3)(4)に入れるのもつとも適切な語をそれぞれA～Dの中から選び符号で答えなさい。ただし、同じ符号を二度以上用いないこと。

- A むろん B あるいは C そもそも D のみならず

〔問二〕 空欄(5)に入れるのもつとも適切な箇所を本文から二十字で抜き出し、抜き出した最初の二文字を答えなさい。(句読点や括弧も一字に数える)

〔問三〕 傍線(6)の「相関関係」の意味としてもつとも適切な説明をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A 二つのものが互いにかかわりあい、一方が変化すれば他方も変化するような関係。
B 一見すると相違点があるものの、重要な共通点があるために同様に扱われる関係。
C もともとは完全には一致しないものの、工夫をして重なり合うようにできる関係。
D 実験と観察をくり返すことで、一方が他方の原因となる法則を特定できる関係。
E 時系列での前後の順序が明確になっているために、歴史的な叙述が可能な関係。

〔問四〕 傍線(7)の「シナリオ性」の意味としてもっとも適切な説明をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A 場面ごとに多様に展開できアドリブが自由に効くということ。
- B 筋書きを想定して見通しを立てながら原因を探すということ。
- C 物語が語られるように一つひとつが詳細に記されるということ。
- D 芝居の演出のように受け手の印象に残る技巧が凝らされるということ。
- E 受容可能性により真偽を決めるために主観が重んじられるということ。

〔問五〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考えに合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- ア 「低線量放射線を長期に被曝したら、がん死する」という命題は、因果関係を探究する科学性と、受容可能性を決める社会性という二つの側面から真偽が評価される。
- イ 「低線量放射線を長期に被曝したら、がん死する」という命題は、必然か偶然かを尋ねる問いとして理解した場合に、真偽の判定を下すことができない。
- ウ 「低線量放射線を長期に被曝したら、がん死する」という命題は、自然法則それ自体の必然性が証明できない以上、それが正しいという結論は得られない。
- エ 必然か偶然かという哲学の問いかけは、根源的な省察を促すものではあるが、その問いをめぐる議論が堂々巡りで迷宮に入り込むのを避けられず、答えに至ることができない。
- オ 必然か偶然かという哲学の問いかけは、自然法則を探究する科学の領域だけでなく、被曝事故の対策など、われわれの社会のあり方の考察にとって重要である。

四 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)とは何だろうか。その定義には実にさまざまなものがあるが、わかりやすく言えば、人々が他人に対して抱く「信頼」、それに「(1)」「お互い様」「持ちつ持たれつ」といった言葉に象徴される「互酬性の規範」、人や組織の間の「ネットワーク(絆)」ということになる。おおざっぱに言えば、これらの社会関係資本によって、集団としての協調性や、「ご近所の底力」といった、市場では評価しにくい価値が生み出される。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災は、あまりのサンジに言葉もないが、唯一の救いは震災後、日本中が⁽²⁾労りと優しさ⁽¹⁾とに包まれたことであろう。言い換えれば、日本という国の社会関係資本の厚み、労りと優しさの源である。見ず知らずの人への「信頼」、自分ばかりが得をしようと思わず、「お互い様だから」と譲り合う互酬性の規範、そして人々の間の絆が見事に示された。

震災中そして震災後、人々がテレビのインタビュウやインターネットなどで発信した言葉には、感動が満ちあふれている。人々は他人の不幸に乗じたり、我先に行動するようなことは決してしなかった。避難所でも、駅でも、計画停電中でも、本当に忍耐強く、互いに譲り合い整然と行動した。それどころか、自分を犠牲にしても弱い者を救った。二〇〇五年八月のハリケーン「カトリーナ」のさいにアメリカで見られたような、商店を略奪するような行為もカームに近かった。⁽³⁾警察も消防も機能していないのに、住民だけで治安が維持された。交通信号が消えているのに人々は交通ルールを守り、事故がほとんど起こらなかった。大切な家族を失ったり、家財も一切合切津波で流されてしまった被災者が多数にのぼったが、深い悲しみと絶望感のうちにありながらも、全国からの救援物資や災害派遣、ボランティアなどに対する感謝の言葉を述べていた。

筆者は三月十一日、東京の都心部で地震に遭遇した。徒歩で三時間かけて帰宅したが、車はまったく身動きできない状態であるにもかかわらずクラクションを聞くことはなかった。また、見ず知らずの者同士が声を掛け合い励ます姿も本当に多く見られた。翌日以降も間引き運転の電車を数百メートルの列をつくって待ち続け、「被災地の人たちのことを考えればなんのことはな

い」と答える。この千年に一度の大災害の中で世界中の人々を感動させた日本人の協調的な行動、その背景にある「信頼」「お互いの規範」「ネットワーク（絆）」こそが、ここでのテーマである社会関係資本である。

もちろん、社会関係資本がいつもこのように素晴らしいとは限らない。社会関係資本にはグークサイドもある。ネットワークは絆とも言い換えることができるが、絆は、『広辞苑』によれば「馬・犬・鷹たかなど、動物をつなぎとめる綱」である。軛くびきであり、しがらみでもある。

三月十七日付の『ニューヨーク・タイムズ』紙は、福島第一原子力発電所の事故に関する東京電力と政府の発表について「困惑するくらい不明瞭」と報じたが、東京電力と監督官庁との関係も「困惑するくらい不明瞭」である。この関係について日本経済新聞社の滝順一は五月一日付の紙面で次のように分析している。

甘さの背景には、もたれ合い体質がある。電力会社と政府の規制当局者、一部の学者が原発推進の国策の下で結び合い、現状を追認する。しかもだれかが決定的な判断を下すことは巧妙に避ける。役所は学者に安全性の判断を委ねる。学者は安全のハードルをそこそこの高さにとどめ、基準をこえる対応は事業者の自主対応に任せる。事業者は規制当局のお達しに従ったまてと言う。外部からは無責任にも映る「原子力村」の行動様式だ。

本来公正中立の立場である者たちが電気事業者とユチヤク(4)していたことは誰の目にも明らかで、だからこそ人々は東京電力の発表も政府の発表も、学者の解説も不信の目で見てしまう。NHKの国会予算委員会中継で、舌鋒げぼうするどく首相の責任を問いただしていた野党議員が思わず「東電さん」と企業名に「さん」づけしていたのを聞き、改めて東京電力の資金力を背景にした影響力を認識させられた。原子力をめぐる人脈のネットワークは、少なくとも冷静な原子力発電の議論がしにくい雰囲気醸成したという意味で、まさに社会関係資本の悪い面を持っていたのは間違いない。

このように、社会関係資本には良い面も悪い面もあるが、もう少し社会関係資本の特性を理解するために、二つの話を紹介し

たい。最初は一九四〇年（昭和十五年）に書かれた次のような話である。

甲府の湯村温泉の旅館、篠笹屋の番頭の喜十さんは、三人いる番頭の末席で、酒もたばこもやらす、話も下手で、見るからにうだつがあらがない男だ。「喜十さんはこの篠笹屋ではどうしても間抜けな人間になっている」。布団の上げ下ろしなど女中のやる仕事までやらされ、あげくの果てには客が不用意に風呂の石畳に置いた眼鏡を踏みつぶし、善処しようとしているのに女中頭に「まるで阿呆扱いに頭ごなしに」叱責され「弁解する口がきけなくて、ただ無念のあまり涙が出そうになるのを押しこらえ」、謝る始末であった。湯村温泉は昇仙峡見物で春秋は客が来るが、八月と冬はカンサンとしてしまい、三人いる番頭の中で「何の芸もない」喜十さんはこの間は暇を取らされてしまう。いまでいうレイオフ、一時解雇である。

一方、伊豆の谷津温泉にある東洋亭には、内田さんという、皆から信頼を集めている気のきいた粋な番頭さんがいる。身だしなみも良く、ときには朝帰りまでするが、それでも彼への周囲の信頼は揺るがない。

この番頭の名は内田喜十、つまり同一人物だ。毎年、甲府の温泉のカンサン期、十二月から翌年三月にかけてと夏の八月は、湯村温泉のダメ番頭の喜十さんは伊豆の谷津温泉へ行き、そこでは有能な番頭内田さんに変身する。内田さんは、伊豆での仕事が終わると熱海に泊まり、そこで喜十さんへと変わる。「篠笹屋にいるときには女中の拭き掃除まで手伝ってそれでもまだ女中に権つくと喰わされて、酒も貰ものまないで勤直にしているのに阿呆扱いにされている。ところが伊豆のこの旅館では彼は貰ものみ、酒も表へ飲みに出かけるが、気のきいた粋な番頭さんだと見なされている」。

これは、井伏鱒二の小説『掛け持ち』である。原作は文庫本でわずか二八頁の短編だが、NHKが一九六一年に制作した「掛け持ちさん」というテレビドラマの原作であり、翌年には小林桂樹と司葉子が主役で、映画化もされている。短編小説でも一本の映画になるのだから、設定の面白さが際立っていたということであろう。

『掛け持ち』は人間の弱さをからめた人情劇の佳作だが、周囲の環境によって変わる番頭さんの立ち位置は、まさに社会関係資本の本質そのものをとらえた話でもある。こうした経験は程度の差こそあれ、誰にでもあるのではないか。気心の知れた友人グループの中や、指導者が自分を高く評価してくれていると思える集まりの中では、のびのびと振る舞い、実力以上の力さえ発

揮する。ところが、そうした人間関係が希薄なグループの中にひとたび置かれると、萎縮してしまつて実力を發揮できない。つまり、人はその置かれた社会環境の中で大きく変わつてしまふのだ。

社会心理学者の山岸俊男は、社会関係資本の例として、孟子の母が子の教育のために三度住まいを変える孟母三遷の故事を挙げてゐる。幼い頃の孟子は墓地のそばに住んでいたときは葬式ごっこをやり、市場のそばに移り住むと商売ごっこをし、学校の近くに寄り住むと学生の真似事をして遊ぶようになった。これも「掛け持ち」と同じである。社会学では「埋め込み」という表現を使うが、まさに周囲の人々との間に「埋め込まれた」何かがある人の行動に影響を与え、ときにはその人の能力さえも左右する。

伊豆の内田さんの社会関係資本と甲府の喜十さんの社会関係資本は、同じ人物でも大きく異なる。内田さんの社会関係資本は彼の能力を十二分に發揮させるものであるのに対して、喜十さんの社会関係資本は彼の力を殺いでしまふ。社会関係資本とは、このように人々の置かれる人間関係によって大きく変わつてしまふもので、周囲の人々との間に埋め込まれて存在している。

(中略)

第二の逸話はハーヴァード大学のロバート・パットナムの『孤獨なボウリング』(Bowling Alone)からの引用である。二〇〇〇年に刊行され、社会関係資本に関する古典となつたこの本の第一章には、会計士のアンティ・ボシユマが、ボウリングを通じて知り合つたジョン・ランバートに腎臓の提供を申し出るといふエピソードが紹介されている。ランバートは、ミシガン大学付属病院を退職した六十四歳のアフリカ系アメリカ人で、それまで三年間腎臓移植を待っていた。一方、ボシユマは三十三歳の白人で「たまたまランバートの状態を知り、自分でも予期しなかつたことだが、自分の腎臓の片方の提供を申し出たのだつた」。パットナムは次のように述べている。

この感動的なストーリーはそれ自身が雄弁なものであるが、『アナーバー・ニュース』での報道につけられた写真は、彼らが職業や世代において異なつてゐるのみならず、ボシユマが白人でランバートがアフリカ系米国人であることも明らかに

している。彼らが共にボウリングをしていたということが、違い（引用者注：通常の利己的な行動と、この献身との違い）を生み出したのだ。このような小さい部分においても——そしてもっと大きな部分においても——われわれ米国人は、互いに再び結び付け合わなければならない。本書のシンプルな主張はこの点にある。

このケースは、人と人とのネットワーク、つまり社会関係資本から生まれる利他的な行動の感動的な例のひとつである。豊かな社会関係資本は、このような献身的な行為を生み出すことができる。「われわれ米国人は、互いに再び結び付け合わなければならない」という部分の「米国人」は、そのまま「日本人」に代えてもおかしくない。

だが、この話の本質は、ボシユマが

(6)

の行為として腎臓の移植を申し出たことである。

(6)

の申し出だからこ

そ、社会関係資本の例なのであって、もし、彼がランバートに金銭を要求したら、それは社会関係資本に基づくものではなく、単なる商行為にすぎなくなる。社会関係資本は多くの場合、利他的な行為を伴う。こうした利他的行為は市場の中で利己的な売買の対象に変えることができる。しかし、ランバートとボシユマのケースは、そうではないから貴重なものである。他人から好意を受けたとき、すぐに財布を取り出してお金を支払うのでは意味がないのである。満員電車でお年寄りに席を譲ったからといって、席を譲られたお年寄りはその好意に対して現金を支払ったりしないし、逆に席を譲る者がすぐに対価を要求するのでは、かえって社会関係資本は崩壊してしまう。

経済学では、ある取引が当事者以外の第三者に及ぼす影響を、外部性と呼ぶ。腎臓を提供するといった利他的行為は、多くの場合、好ましい影響を第三者に及ぼす。二〇一〇年から一一年にかけて起こった、匿名でランドセルを寄贈するタイガーマスク運動のように、一人が無償の利他的行為をすれば、それがまた別の利他的行為を生む。

外部性とは、個人や企業などの経済主体の行動に対して市場を通じないで影響を与えるものであり、便益を与えるものを外部経済、損害を与えるものを外部不経済と呼んでいる。外部経済の古典的な例は、養蜂業者の蜂が果樹園で花の間を飛び回り、蜜を集めると同時に授粉するケースである。この場合、市場を通さずに養蜂業者と果樹園主の双方が便益を得ている。技術革新や

教育によるスビル・オーバー（波及）効果、公園・歴史的建造物などが近隣に及ぼす効果も外部経済である。一方、公害や地球温暖化問題は外部不経済の例になる。たとえば麻薬を禁止するのは外部不経済が著しいからである。技術開発や教育を政府が支援するのも、(7) という判断があるからである。

腎臓の提供のケースはもっと簡単で、臓器取引の市場をつくってしまえばよい。実際に経済学者の多くは、そんな個人の善意に頼るのではなく、臓器市場をつくってしまえば、もっと効率的に、移植を受けなければならぬ人々を救えると議論するだろう。

しかし、社会関係資本の外部性は、市場に内部化してしまうと人の心を踏みにしることになり、社会関係資本そのものを毀損してしまふ可能性が高い。したがって、社会関係資本における外部性は、むしろ市場の限界を補完するものとして内部化しないほうがよいケースが多いのだ。実際、ボシユマは相手がランバートだから腎臓の提供を申し出たのであって、収入を得たいためではなかった。たとえ臓器市場があっても、それだけではボシユマは腎臓の提供を申し出なかつただろうし、ランバートは腎臓の提供者を見つけることはできなかつたかもしれない。言い換えれば、このエピソードはボシユマとランバートの間にポウリングを通じて何らかの信頼関係があつたからこそ成立した話であり、日頃の人づきあいがなければそもそも成り立たないという意味で、まさしく社会関係資本である。

（稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門』による）

〔問一〕 傍線(2)(3)(4)(5)のカタカナを漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

- (2) サンジ (3) カイム (4) ユチャク (5) カンサン

〔問二〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適切な語句をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A 類は友をよぶ
- B 安に居て危を思ふ
- C 情けは人の為ならず
- D 天は自ら助くる者を助く
- E 昨日は人の身今日は我が身

〔問三〕 空欄(6)に入れるのにもっとも適切な語を本文中より抜き出し、三字以内で答えなさい。

〔問四〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適切な言葉をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A 技術革新を速やかに達成できる
- B 外部不経済を早急に除外できる
- C 市場開放が急速に促進される
- D 外部経済がきわめて高い
- E 開発教育の利益が大きい

〔問五〕 次のア、イ、オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 利他的な行為に対して経済的な報酬で対応できれば、当事者相互の間に互酬性が機能し、社会関係資本が醸成されやすくなる。

イ 人の実力は、旅館という職場の狭い範囲の人間関係であつても影響を受けるものであり、その置かれた社会環境によつて大きく変化する。

ウ 人々の間の協調的な行動を促す社会関係資本は、「近所の底力」といった市場では評価されにくい価値を生み出し、非常時にも大きな力を発揮する。

エ 社会関係資本のグークサイドは、原発の安全性をめぐる電気事業者と政府の規制当局者、学者との間に生じた大きな対立にあらわれている。

オ 社会関係資本は、市場が提供できない価値を生み出すとともに、臓器取引のような新たな市場をつくりだすことも可能にする。

